

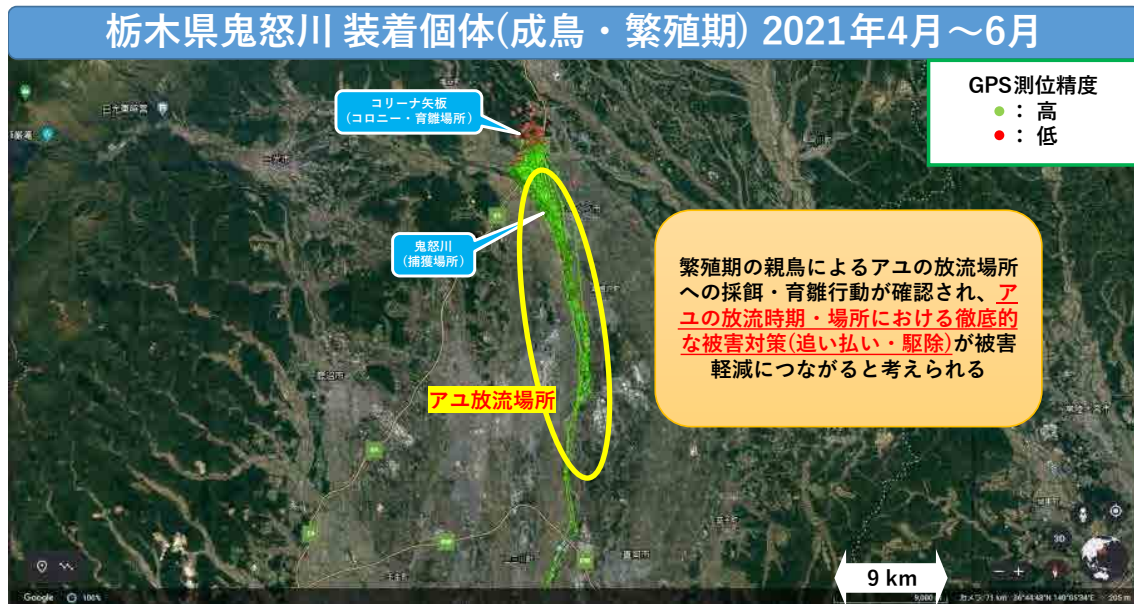
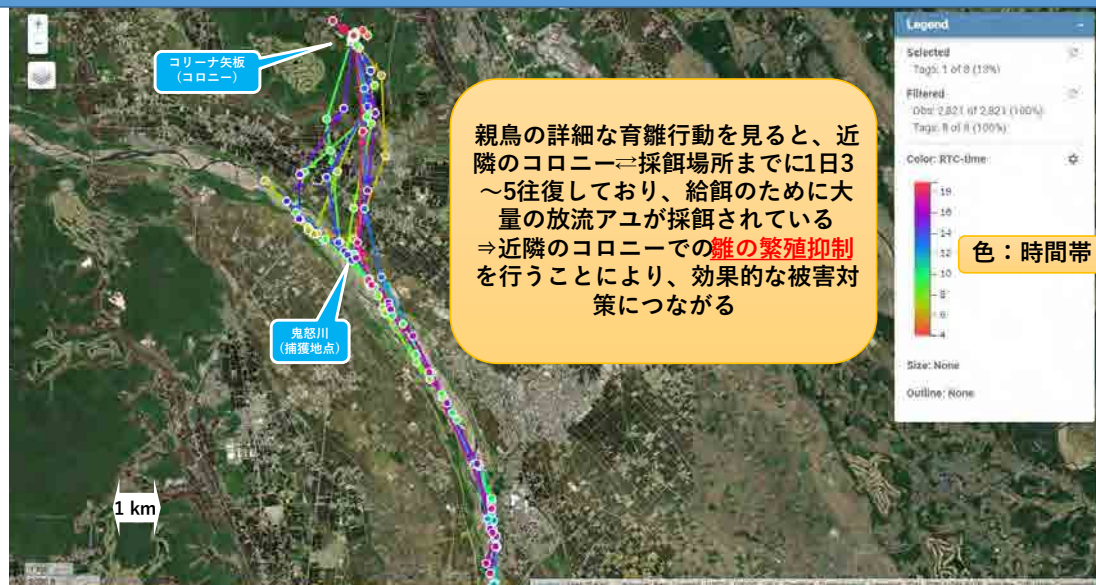


図-10 繁殖期の成鳥の行動記録

コリーナ矢板コロニーで繁殖していた成鳥は、同時期に放流を実施していた鬼怒川で採餌行動を行っている様子が確認された（図-10）。アユは放流後 10 日間が最も捕食されるといわれていることから、アユの放流時期とカワウの育雛時期が重なっている場所では、放流場所におけるカワウの飛来防除対策（追い払いやテグス張り等）は被害を減らす上で、最も重要な意味を持つ。

栃木県鬼怒川 装着個体(成鳥・繁殖期) 6月5日



栃木県鬼怒川 装着個体(成鳥・繁殖期) 7月18日



図-11 育雛期（上）と育雛が終了した際（下）の成鳥の1日の行動記録

育雛期の成鳥は、1日に採餌エリアとコロニーを3～5回往復し、給餌を行っている様子が確認され（図-11 上）、育雛が終了すると1日1往復の行動に戻る様子が確認された（図-11 下）。このことから、育雛期のカワウの親鳥は給餌のため普段の何倍もの餌を採餌すると考えられる。やはり、コロニーの雛鳥へ与える給餌量を減らすためにもドライアイス等による繁殖抑制の実施はカワウの被害を減じる上で有効な手段と考えられる。

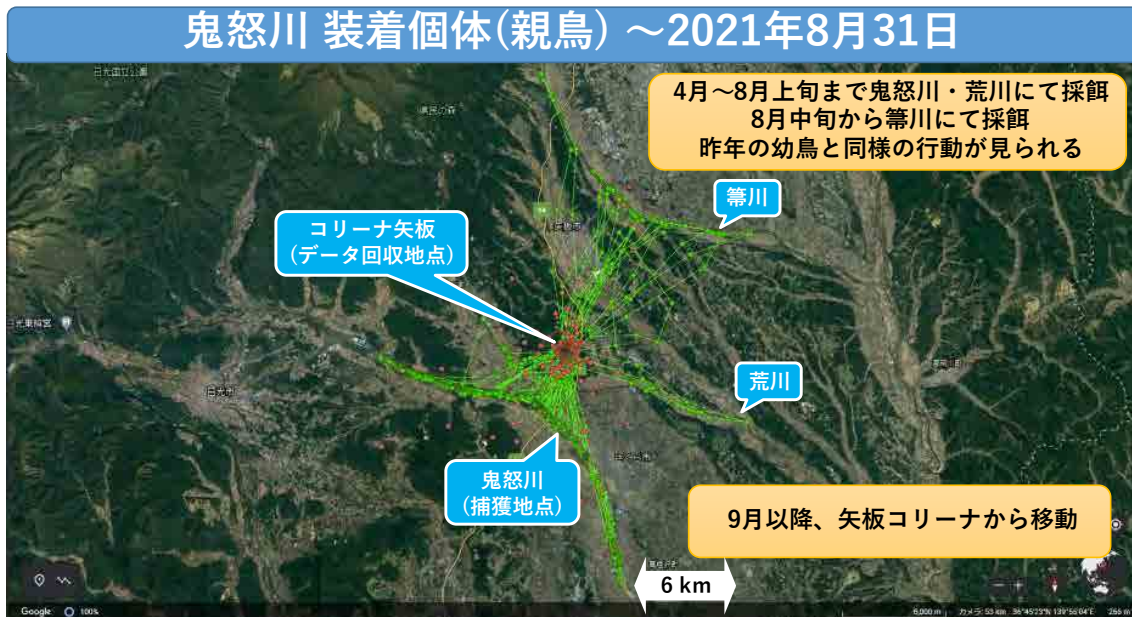


図-12 成鳥の2021年4月から2022年2月までの長期的な行動記録 4月～8月下旬まで
(上)と全計測期間の長期記録の概要(下)

この成長は、鬼怒川で捕獲されたのち、4月から8月上旬までは、鬼怒川・荒川を採餌エリアとしていたが、8月中旬以降、箒川に採餌エリアを移す行動が見られた(図-12上)。これは、前述の雛鳥と同じ行動だったことから、この時期、アユの産卵行動が始まるためアユのいるエリアが変わり、それを追ってカワウも行動を変化させたものと推測さ

れる。その後、9月以降は、栃木県、群馬県、茨城県、千葉県を移動し、再び栃木県に戻ってくる移動が確認された(図-12 下)。成鳥も前述の巣立ち雛も、秋以降越冬期には、関東全域を大きく異動し、採餌を行っていることがこちらのデータからも示された。

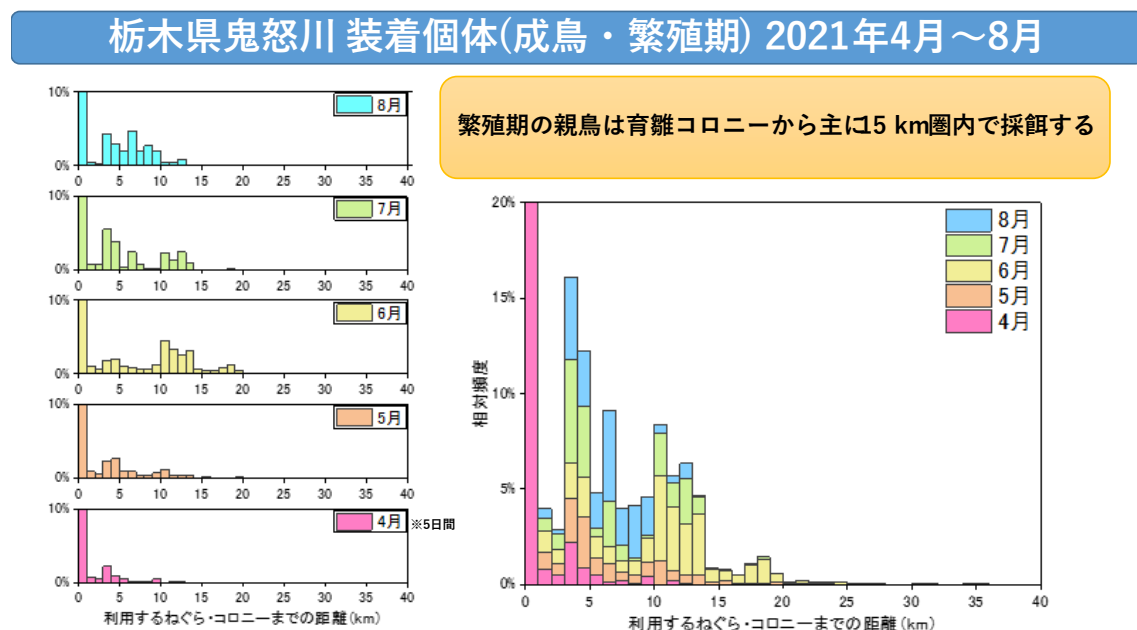


図-13 各季節のねぐら・コロニーからの行動範囲を示すヒストグラム

成鳥においてもカワウの行動圏は、主に 15 km 圏内で採餌を行っている様子が示され、これは、過去の記録や巣立ち雛の行動記録と同様の傾向が認められた(図-13)。

続いて、本年度初めて装着を行った群馬県渡良瀬川流域で捕獲された巣立ち雛と成鳥の行動記録について紹介する。



図-14 群馬県桐生市桐生川、渡良瀬川のねぐら・コロニーとカワウの捕獲と放流地点

群馬県桐生市桐生川で捕獲し、渡良瀬川にて放鳥した (図-14)。このエリアには、高津戸ダムという群馬県内最大のねぐら・コロニーが付近にあるため(図-14)、このねぐら・コロニーを使っている個体が採餌していると予想された。